

『タットヴァ・サングラハ』「外界対象の検討」章における シャーンタラクシタとシュバグプタの一切知者論争

松岡 寛子

0 はじめに

中観派シャーンタラクシタ (Śāntarakṣita: c. 725–788) 著『タットヴァ・サングラハ』(Tattva-saṅgraha, TS)「外界対象の検討」(Bahirarthaparīkṣā, BP) 章は、唯識派の学説である「この三界はただ表象のみのものである」という〈唯識性〉(vijñaptimātratā)¹の証明を主題とする。

直弟子カマラシーラ (Kamalaśīla: c. 740–795) によると、この〈唯識性〉は大別して次の二種の方法によって証明される²。

¹本論では、vijñapti, vijñāna, citta に訳語「識／表象」、「知／認識」、「心」をそれぞれ便宜上充てが、いずれも同義語であることを予め断っておく。

Cf. ViV 3,3: चित्तं मनो विज्ञानं विज्ञप्तिश्चेति पर्यायाः ।

(「『心』(citta)と『意識』(manas)と『知』(vijñāna)と『表象』(vijñapti)とは同義語である」)

²以下の BP 冒頭部 (TSP on TS BP introduction) と、1. と 2. の連結部 (TSP on TS BP 34–35) に挿入されるカマラシーラの分科に基づく。

TSP on TS BP introduction (TSPB 670,11–671,8): तत्राभ्यां प्रकाराभ्यां विज्ञप्तिमात्रताभीष्टा — बाह्यस्य पृथिव्यादिस्वभावस्य ग्राह्यस्याभावे ग्राहकत्वस्याप्यभावात् । सत्यपि वा सन्तानान्तरे *ग्राह्यग्राहकलक्षणवैधुर्यात् ।

*Pa G B T; ins. ग्राह्ये J.

(「その〔唯識派の見解〕では以下二通りの方法によって〈唯識性〉が認められる。1. 地等(四大種)を自性とする外界〔対象〕が把握対象として存在しなければ〔知が〕把握者であることもまたない〔という方法〕によって。2. また、他相続が存在するとしても、〔知は〕把握対象と把握者という二相を欠いている〔という方法〕によって」)

TSP on TS BP 34 (TSPB 681,21–22): ... इति सिद्धो बाह्यस्य पृथिव्यादेर्ग्राह्यस्यासद्व्यवहारस्तदसिद्धौ ग्राहकत्वमपि ज्ञानस्य तदपेक्षं कल्पितं नास्तीति सिद्धा विज्ञप्तिमात्रता ॥ ३४ ॥

「... 1. したがって『地等の外界対象は把握対象として存在しない』という言語表現は成立する。それ(外界対象の把握対象性)が成立しなければ、知の把握者性もま

1. 把握対象 (grāhya) として地等の外界対象の存在が不合理である (arthāyoga)。それに相関して知 (vijñāna) の把握者 (grāhakatva) も成立しない。(TS BP 1–34)

2. 他心が外界に存在するとしても (saty api bāhye santānāntare)、外界対象や他心との間に知は把握対象・把握主体関係をもたない (grāhya-grāhakalakṣaṇavaidhurya) [、即ち知は自己認識である (ātmasaṃvedana)]。(TS BP 35–119)

(a) 外界対象否定論証 (bāhyārthanaiṣedhaka-pramāṇa) の提示 (35–86)

i. 有形象知・無形象知・異形象知による対象把握の否定 (35–82)

たそれ(外界対象の把握対象性)に相関して構想されることがない。ゆえに〈唯識性〉は成立する。」

TSP on TS BP 35 (TSPB 682,11–12): तदेवमर्थयोगाद्विज्ञप्तिमात्रतां *प्रतिपाद्य संप्रति ग्राह्यग्राहकलक्षणवैधुर्यात्प्रतिपादयन्नाह — अनिर्भासमित्यादि ।

*rnam par rtog pa tsam du T for विज्ञप्तिमात्रताम्

(「1. 以上のようにして対象〔の存在〕が不合理であることに基づいて〈唯識性〉を説明した。2. 次に〔知が〕把握対象と把握者という二相を欠いていることに基づいて〔師シャーンタラクシタは次のように〕anirbhāsam 云々 (TS BP 35) と〔〈唯識性〉を〕説明する」)

TSP on TS BP 35 (TSPB 682,13–14): तस्मादात्मसंवेदनमेव सदैव ज्ञानं सत्यपि बाह्ये सन्तानान्तर इति सिद्ध्यति विज्ञप्तिमात्रता ।

(「2. したがって、外界に他相続が存在するとしても、知は常に自己認識にほかならない。ゆえに〈唯識性〉は確立される」)

TSP on TS BP 87 (TSPB 700,14–15): एवं बाह्यार्थनिषेधकं प्रमाणमभिधाय तत्साधकं परंप्रणीतमपाकर्तुमाह — धिया इत्यादि ।

(「(a) 以上のようにして〈外界対象を否定するプラマーナ〉を示したので、(b) 次に他〔学派〕の支持する〈それ(外界対象)を証明する〔プラマーナ〕〉を論駁するために〔師シャーンタラクシタは次のように〕dhiyaḥ云々 (87) と述べる」)

外界対象との間に知は把握対象・把握主体関係をもたない

- ii. 仏知による他心把握の否定 (83-86)
他心が外界に存在するとしても、他心との間に仏知は把握対象・把握主体関係をもたない

(b) 外界対象存在論証 (bāhyārthasādhakapramāṇa) の批判 (87-114)

- 結論 (115-119)

本論は、上記2-(a)-ii「仏知による他心把握の否定」が議論される TS BP 83-86 の解釈に焦点を当てる³。その議論において仏知による他心把握を肯定する対論者となるのは『外界対象論証偈』(Bāhyārthasiddhikārikā, BASK)においてダルマキールティに至るまでの唯識派の学説を悉く批判する仏教内部の外界実在論者シュバグプタ (Śubhagupta: c. 720-780)⁴ である。TS BP 83-86 に関連する TSP、BASK の検討を通して、(1) 2「他心が外界に存在するとしても、知は外界対象や他心との間に知は把握対象・把握主体関係をもたない (= 知は自己認識である)」と

³ 同章における TS BP 83-86 の位置づけに関しては先行研究において異論がある。太田 1970: 30 と McCLINTOK 2010: 354 は無相唯識説批判に、栗原 1993: 192 は sahopalambhaniyama 論批判にそれぞれ関連する議論として理解する。

太田 1970: 30: 「前節において、形相を以て把える認識がすべて虚妄であるという無相唯識説が示されたので、次に仏陀が衆生を救済する場合、仏陀は衆生を如何に見そなわして教化されるのか、このような仏陀の認識について疑問が提起される」

栗原 1993: 192: 「まず、TSP における議論の流れを紹介しよう。唯識性を証明するために、「青とその知は異ならない、必ず同時に認識されるから」というダルマキールティ (Dharmakīrti, 600-660) の有名な推論式が呈示され、それに対して、様々な論難が提起され、それらがすべて否定されていく。そこで、「仏陀の認識 (vijñāna) についても、『有形象 (sākāra) か、無形象 (nirākāra) か、また、同時にか、別時に生じるか』という懸念が起こらないことがあるか。」(BASK95) というシュバグプタの偈が反論として引用され、カマラシーラはこれを散文の形で次のように説明する」(注は省略)

McCLINTOK 2010: 354: “The answers come in a section that appears to accept Śubhagupta’s assessment of Vijñānavāda as espousing that awarenesses are devoid of images (nirākāra), at least ultimately. In this context, Śāntaraksita and Kamalaśīla seem to reject the idea that the apprehender/apprehended relationship exists even figuratively for a buddha.” (注は省略)

⁴ 経量部或いは毘婆沙師と目される。彼の所属学派に関する研究史は McCLINTOK 2010: 163 n.396 にまとめられている。

いう凡夫の知の枠組みに仏知はどのように関わるのか、また (2) 仏知による他心把握が否定される場合、ブッダは〈一切知者〉たり得るのか、これら二点を明らかにすることを目的とする。

1 仏知の自己認識性 (TS BP 83)

1.1 さて、TS BP 83-86 は次のシュバグプタの反論 BASK 95 によって導入される。

「それ(知)は、有形象 (sākāra) であれ、無形象 (nirākāra) であれ、〔対象と〕同時に生じるものであれ、〔対象とは〕別時に生じるものであれ、〔決して対象を把握することがない〕」という考察 (cintā) が「凡夫の知に関してのみならず」世尊の知に関してはどうして適用されないことがあろう⁵。

この BASK 95 をカマラシーラは次のように解釈する⁶。

⁵ TSP on TS BP 83 (TSPB 699,11-12)^{a)}:

साकारं तन्निराकारं तुल्यकालमतुल्यजम् ।
इति बौद्धेऽपि विज्ञाने किं न चिन्ता प्रवर्तते ॥

^{a)} BASK 95 (HATTORI 1960: 10 list 14). BASK 93-95:

/ ji ltar thogs med gzigs pa yi /
/ mkhyen ba kun du 'jug pa ltar /
/ de bzhin cung zad mthong ba yi /
/ shes pa gzugs la sogs la 'jug / 93
/ thams cad mkhyen dang gzhan dag tu /
/ shes pa tsam du khyad bar med /
/ kun tu thams cad rnam mkhyen pas /
/ bdag nyid che rnam byed brag dbye / 94
/ rnam pa bcas sam ci rnam med /
/ dus mnyam mi mnyam las khyes shes /
/ sangs rgyas mkhyen la'ang ci yi phyir /
/ byis pa rab tu 'jug mi byed / 95

(「たとえば、くまなくご覧になる方 (仏陀) にとって直観 (darśana) は一切に関して遍く起こる。それと同様、わずかしき見ない者 (凡夫) にとって知識は色 (rūpa) 等に関して〔のみ〕起こる。(93)

一切知とその他諸々の〔知〕の間には知識という点でのみ相違はない。〔しかしながら、〕一切の形相を遍くご覧になる方〔の知〕は〔凡夫の知と〕偉大性 (mahātmya) が異なるのである。(94)

知が有形象か無形象か、〔対象と〕同時に生じるものか〔対象と〕同時には生じないものか、世尊の知に関してまた、どうして愚者 (= 唯識派) が追求すまいか。(95)」)

⁶ カマラシーラ注は、次注 a) に示す BASK 自体の文脈上の理解と全面的に一致するものではない。

有形象知等による〔外界〕対象把握がいかに不合理か、〔君(シャーントラクシタ)によって〕考察されている。それと同様に、世尊の知による〔外界〕対象把握についても、どうして〔そのように君によって考察〕されないことがあろう⁷。

このうち、「考察」の内容は次の TS BP 35 においてシャーントラクシタによって既に述べられている。

知は、顕現をもたないもの (anirbhāsa) であれ、顕現をもつもの (sanirbhāsa) であれ、〔対象とは〕異なる顕現をもつもの (anyanirbhāsa) であれ、決して外界対象を認識することがない⁸。

2-(a)-i「有形象知・無形象知・異形象知による対象把握の否定」が開始される本偈では、いかなるあり方の知によっても外界把握は不合理であることが簡潔に述べられている。以降四十偈余りにわたって、知のあり方を有形象知、無形象知、対象とは異なる形象を有する知という三種に分類したうえで、いずれの知も外界対象を認識し得ないことが主張される⁹。つまり、外界対象と知の間に把握対象と把握者の関係が成立せず、知は常に自己認識である。これが「考察」の内容である。

但し、この「考察」はいずれも三種に分類される凡夫の知に関するものである。シュバグプタは、同様の考察がブッダの知に関しても唯識派によってなされるべきことを主張する。唯識派によってこの考察がブッダの知に関しても適用

⁷TSP on TS BP 83 (TSB 699,13-14): यथा साकारादिविज्ञानेन नार्थस्य ग्रहणं युक्तमिति¹⁾ चिन्ता क्रियते तथा भगवतोऽपि ज्ञानेनार्थस्य ग्रहणं प्रति किं न क्रियते

¹⁾साकारादि° ... cf. TS BP 35.

⁸TS BP 35 (TSB 1998):

अनिर्भासं सनिर्भासमन्यनिर्भासमेव च ।
विजानाति न च ज्ञानं बाह्यमर्थं कथञ्चन ॥ ३५ ॥

⁹特に無形象知識論(形象をもたない知が外界対象を認識する)の批判に当たっては、sahopalambhatva (〔青の形象と青の形象の知とが〕必ず同時に認識されること)と samvedana (「知であること」)とを証因とする、ダルマキールティの有形象知識(唯識)論が用いられ、議論は詳細にわたる。

され、ブッダの知による外界把握が否定される場合には、一切を遍く把握する方としてのブッダの一切知者性と矛盾が生じることが示唆されている¹⁰。

1.2 このシュバグプタの反論に対してシャーントラクシタとカマラシーラは TS BP 83 及び TSP において次のとおり応じる。

a それ(知)は有形象であれ、無形象であれ、〔知自身〕以外のものの (anyasya) 認識者 (vedaka) であることは不合理である。ゆえに (iti)、〔凡夫の知に関するこの〕考察が実にブッダの知についても適用されることはない¹¹。

a' 実に、世尊の知が それ(知以外のもの)の (tasya) 把握者 (grāhaka) たることが認められることはない。もしも認められるのであれば、この〔世尊の知〕についても〔有形象であれ、無形象であれ、知以外のものの把握者であることは不合理である〕という〕考察がなされようが。

b なぜならば、かの方(世尊)は一切の障碍(煩惱障と所知障)を欠いているために、かの方には把握対象と把握者という概念構想 (grāhyagrāhakavikalpa) がないと認められるからである¹²。

a, a' における下線部「知以外のものの認識者／把握者」に注目すると、シュバグプタが、ブッダの知と外界対象の間に能取・所取関係を認め、ブッダの知を外界対象の把握者とみなすのに対して、ここで、シャーントラクシタとカマラシーラはブッダの知を知以外のものの把握者として認めない。

¹⁰シュバグプタによる一切知者の定義については後ほど 3.1 で検討する。

¹¹TS BP 83 (TSB 2046):

साकारं तन्निराकारं युक्तं नान्यस्य वेदकम् ।
इति बौद्धेऽपि विज्ञाने न तु चिन्ता प्रवर्तते ॥ ८३ ॥

¹²TSP on TS BP 83 (TSPB 699,15-16): न हि भगवतो ज्ञानं तस्य ग्राहकमिष्यते । येनात्रापि चिन्ता क्रियेत । यावता तस्य सर्वावरणविगमान्न ग्राह्यग्राहकविकल्पोऽस्तीतीष्टम् ।

さらに、ブッダの知が「知以外のものの把握者」たり得ないこと(a, a')の理由bは、ブッダは所知障と煩惱障とを断じているために把握対象と把握者という概念構想をもたないからであるとされる¹³。知が何らかの把握者である限り、その知は障害を断じていないために仏知ではない。

シャーンタラクシタとカマラシーラにとって、このように、ブッダの知が把握者たることはそもそも成立しないので、ブッダの知に関しても外界把握の不合理性の考察を適用する必要がないのである。

2 仏知による他心把握の否定(TS BP 84)

2.1 唯識派にとってブッダの知であれ、外界との間に把握者と把握対象の関係は認められないが、他心に対しても把握者ではないのか。このブッダの知による他心把握については問題は単純ではない。〈唯識性〉の証明方法2「他心が外界に存在するとしても、知は他心との間に把握主体と把握対象の関係をもたない」において「他心が外界に存在するとしても」という譲歩節が付されるように、唯識派にとってもなお、他心の存在は否定されないからである¹⁴。

¹³但し、bが実際にシュバグプタに有効かどうかは疑問が残る。シュバグプタは既にBASK 97においてこのような唯識派の主張を予期して次のような予防線を張っているからである。したがって、彼にとって、bはBASK 97abのトートロジーでしかないであろう。なお、先にTS BP 83の導入として引用されたBASK 95とは異なり、同偈頌はTSPに引用されない。

BASK 97:

/ sgrib pa spangs phyir shes bya la /
/ mi rigs zhes pa 'brel pa med /
/ ji ltar de ni shes bya la /
/ 'jug pa de tsam mthun par bsgre / 97

(「『ブッダは』 障碍を既に断じているがゆえに所知を認識することがない」という〔唯識派の主張は〕馬鹿げている。なぜならば、それ(一切知)は所知に関して起こるからである。〔さもないければ、どうして一切知が〕〈そのみ〉(tanmātra)(=〈唯識〉)に等しいものとなろう。(97)」)

¹⁴ダルマキールティは、ヴァスバンドウの『唯識二十論』における他心の存在論証を、『他相續論証』(*Santānāntara-siddhi*)において補強する。KATSURA 2007: 421 参照。ラトナキールティの『他相續批判』(*Santānāntaradūṣaṇa*)に

そこで、シュバグプタによって次のような反論が提起されることをカマラシーラは想定する。

たとえ外界対象が把握対象として存在しないとしても、他相續中にある他心は〔把握対象として〕まさしく存在する。どうしてそれ(他心)が世尊の知にとって把握対象でないことがあろう¹⁵。

この想定反論は次のBASK 140-141abの趣意を汲んだものである。

他心を知る者の認識がどうして偽(a-yathārtha)であろう。もし他心が存在するならば、〔その場合〕その知は〔他心の〕形象を伴って生じる。対象が存在〔する場合に知が〕それ(対象)の形象を〔伴って生じるならば〕、〔その〕知は把握者(grāhaka)とみなされる¹⁶。

ここでは、外界対象と仏知の間に所取・能取関係を認めるのと同じく、他心と仏知の間にも所取・能取関係を認めるという、シュバグプタの立場が表明されている。

よれば、他心の存在は勝義においては否定されるとしても、なおも世俗的に否定されない。KAJIYAMA 1965; 梶山 2000; INAMI 2001; 稲見 2007 参照。

¹⁵TSP on TS BP 84 (TSPb 699,17-18)ⁱ: यद्यपि बाह्योऽर्थो नास्ति ग्राह्यस्तथापि चित्तान्तरमस्त्येव सन्तानान्तरवति। तद्वगवज्ज्ञानस्य किमिति ग्राह्यं न भवेत्

ⁱ n.e. BASK, *Sarvajñasiddhikārikā*, *Śrutiparīkṣākārikā*, *Anyāpohavicārakārikā*, *Īśvarabhāṅgakārikā*.

¹⁶BASK 140-141ab:

/ gzhan sems shes pa'i shes pa ni /
/ ji bzhin don min ji lta bur /^a
/ gang tshe gzhan gyi sems yod na /
/ shes pa de ni rnam par 'jug / 140
/ don yod de yi rnam pa yi /
/ rnam par shes pa 'dzin par 'dod /

^aBASK 140ab=ViK 21ab (SHASTRI 1967: 59 n.128).

ViK 21:

परचित्तविदां ज्ञानमयथार्थं कथं यथा।

स्वचित्तज्ञानमज्ञानाद्यथा बुद्धस्य गोचरः ॥ २१ ॥

(「【反論】他心を知る〔ヨーギン〕たちの認識がどうして偽(ayathārtha)であろう。

【答論】たとえば、自心〔を知る人の〕認識が〔偽ではないのと〕同様である。仏の対象領域のようではなく、〔自心や他心を〕認識することがないから」)

2.2 この反論を受け、シャーンタラクシタは TS BP 84 において次のように答える。

(a-1) 認識に従って行く者たち(経量部)の見解では／(a-2)〔世尊の〕知が認識に従って行くものとして認められるならば((a) *aupalambhikadarśane*)、〔ブッダによって〕他〔相続〕中にある貪愛(*rāga*)等が認識される場合、〔仏知に〕それ(他相続中の貪愛等)との(b)類似性(*sārūpya*)が存在するがゆえに、〔ブッダに〕障碍が存在することになってしまう¹⁷。

このうち、(a) ‘*aupalambhikadarśane*’ と (b) *sārūpya* とが解釈上の鍵となるので、以下にそれぞれを検討する。

2.2.1 (a) ‘*aupalambhikadarśane*’ は先行研究において正確な理解がなされているとはいえない¹⁸。カマラシーラは (a) ‘*aupalambhikadarśane*’ を次のように説明している。

〔*aupalambhika* とは〕「認識に従って行く者たち」(*upalambhena caranti*) という意味である¹⁹。

¹⁷TS BP 84 (TSB 2047):

अन्यरागादिसंवित्तौ तत्सारूप्यसमुद्भवात् ।
प्राप्नोत्यावृत्तिसद्भाव औपलम्भिकदर्शने ॥ ८४ ॥

¹⁸先行諸訳における (a) の解釈は次のとおりである。

- JHA 1936: 973: “under the view of the ‘apprehensionist’”
- 栗原 1993: 192; 196 n. 9: 「認識論者の見解では／「世尊の智」(*darśana*) が認識 (*upalambha*) を本質とすると認められる時」
- 神子上 1996: 48: 「〔仏陀の知識が〕認識手段を有するとする見解の場合には」
- McCLINTOCK 2010: 354: “as those who uphold a “view in which there is an objective referent” (*aupalambhikadarśana*)”

JHA は特に ‘apprehensionist’ を ‘idealists’、‘the idealistic, view of the lord’ というように、唯識派に同定する。栗原以外はいずれも、カマラシーラが明示する a-1 と a-2 の二種の解釈のうち、a-1 しか提示していない。なお、栗原の第二解釈は *aupalambhika* の文法的解釈の点に、神子上は二種の解釈をひとつに混交している点に、それぞれ問題がある。

¹⁹A 4.4.8 car-a-ti (KATRE 1989: 482: “to denote ‘moves or eats with it’ (*cār-a-ti*)”)

a-1 〔*aupalambhikadarśana* は Gen. Tp. であって〕「認識に従って行く者たちの *darśana* 即ち『見解』(*mata*) では」という意味である。

a-2 あるいはまた、〔*aupalambhikadarśana* は Kdh. であって〕「認識に従って行くものである世尊の *darśana* 即ち『知』(*jñāna*) が認められる場合 (Loc. Absol.)」という意味である²⁰。

カマラシーラによれば、*aupalambhika* という語が「認識に従って行く者」という意味であることは両解釈に共通する²¹。

aupalambhikadarśana という複合語は、a-1 では Gen. Tp. で「認識に従って行く者たちの見解」という意味であり、a-2 では「認識に従って行くもの」と「〔世尊の〕知」とが同格とされる。

‘*aupalambhikadarśane*’ という語の第七格は、a-1 では「認識に従って行く者たちの見解では」という意味になり、a-2 では絶対節と解され、「〔世尊の〕知が認識に従って行くものとして認められる場合」という意味になる。

さらに、a-1 は「経量部の見解では」、a-2 は「ブッダの知が把握主体であるならば」という内容がそれぞれ意図されていると考えられる。いずれもシュバグプタの立場であり、特に a-2 に示唆される学派が経量部に同定されることについては次項において検討する。

2.2.2 カマラシーラは同詩頌の要点を次のとおり提示する。

実に、少なくともまさに (b) 類似性に基づくならば、他相続中にある貪愛等の認識は

²⁰TSP on TS BP 84 (TSPB 699,21–23): उपलम्भेन चरन्ती-त्यौपलम्भिकास्तेषां* दर्शने मते । यद्वा औपलम्भिके भगवतो दर्शने ज्ञानेऽभ्युपगम्यमाने सतीत्ययमर्थः ।

²¹通常、*aupalambhika* は “characterized by the heresy of *upalambha*” (BHSD 163) の意味で、「取著」、「有所得」等と漢訳される。『八千頌般若経』、*Mahāyānasūtrāṅkāra*、*Śikṣāsamuccaya* 等に用例が見られ、いずれも認識の対象を実体視するような愚昧な者、特にそのような菩薩の限定句として用いられる。TSP のここにおける用例とは異なる。

合理性があるが、他の場合には不〔合理〕である。過大適用の過失に陥るから²²。

仏知が他心中の貪愛等を認識することは仏知と他心の間に類似性がある場合には成立するが、そうでなければ成立しない。この論理は、知が対象を認識することの根拠を知と対象の類似性に求める、経量部の対象相似性、対象類似性 (arthasārūpyatā, arthākāratā) 理論に対するダルマキールティによる批判と構造を同じくする²³。そのうち、PV3.434 は、次のとおり、シャーンタラクシタによっても TS BP 75 において既に引用されている。

b-1' 〔知が対象と〕全面的に類似しているとすると、知に非知性 (ajñānatā=jaḍarūpatva) 等が存在することになる。

b-2' ある点で〔部分的に〕類似しているとする、いかなる〔知〕でもいかなる〔対象〕をも認識し得ることになる²⁴。

ここでは、知が、把握対象と把握者の関係を前提とする認識主体である場合の不都合を示している。知と対象の類似性を (b-1') 全面的なもの (b-2') 部分的なものに場合分けしたうえで、知による対象把握の不合理性を簡潔に示している。

²²TSP on TS BP 84 (TSPb 699,19–20): अन्यसन्तानवर्ति-रागादिसंवेदनं हि यदि परं सारूप्यादेव युक्तं नान्यथाऽतिप्रसङ्गात् ।

²³PV3.428–436.

²⁴TS BP 75 (TSb 2038)^{a)}:

सर्वात्मना च ⁱ⁾ सारूप्ये ज्ञानेऽज्ञानादिता ⁱⁱ⁾ भवेत् ⁱⁱⁱ⁾ ।
साम्ये केनचिदंशेन सर्वं स्यात्सर्ववेदकम् ^{iv)} ॥ ७५ ॥

ⁱ⁾ च TS; हि PV. ⁱⁱ⁾ ज्ञानेऽज्ञानादिता TS; ज्ञानमज्ञानतां PV. ⁱⁱⁱ⁾ भवेत् TS; ब्रजेत् PV. ^{iv)} सर्वं स्यात्सर्वं TS; स्यात्सर्वं सर्वं PV.

^{a)} PV3.434 (海惠 1960: 38–39 n. 8; 戸崎 1985: 115 n. 36):

सर्वात्मना हि सारूप्ये ज्ञानमज्ञानतां ब्रजेत् ।
साम्ये केनचिदंशेन स्यात्सर्वं सर्ववेदनम् ॥ ४३४ ॥

(戸崎 1985: 115: 「全体的に相似しているならば、知が知でなくなるであろう。また、部分的に相似しているならば、すべて (の知) がすべて (の対象) を認識することになる」)

仏知と他心の類似性を、同様に (b-1) 全体と (b-2) 部分に分けて、カマラシーラは次のようにその不合理性を解説している。

b-1 それゆえ、もし〔仏知と他心の〕類似性が全面的 (sarvātmanā) だとすれば、世尊の知も貪愛をもつもの (rakta=rāgavat) となる。このような場合には煩悩障が未だ断じられていないことになる。したがって、〔ブッダに〕障碍が存在することになってしまう²⁵。

b-2 また、もし〔仏知と他心の〕類似性が部分的 (ekadeśena) だとしても、二種の形象 (dvyākāra) が未だ断じられていないがゆえに、〔ブッダに〕所知障が存在することになってしまう。なぜならば、〔ブッダが〕把握対象〔と把握者の〕形象によって汚染されたものとなる (grāhyākāraḥkalāṅkitatva) からである。即ち、一つのもの (=唯識／仏知) (eka) に実有なる (bhāvika) 二相性 (=把握対象と把握者／自心・他心) (dvairūpya) があることは不合理である。したがって必然的に、それ (二相性) は誤認されたもの (bhrānta) であると確定されるべきである。錯誤知の種子 (bhrāntabīja) である塵重性 (daṣṭyālpa) が未だ断じられていないから、世尊はまさしく障碍を未だ断じていない者 (aprahīṇāvaraṇa) となる²⁶。

このうち b-1 では仏知と他心と全面的に類似するとすれば、仏知に煩悩障があることになる、b-2 では仏知と他心と部分的に類似するとすれば、仏知に所知障があることになる、とそれぞれ過失が指摘されている²⁷。

²⁵TSP on TS BP 84 (TSPb 699,19–21): ततश्च यदि सर्वो-त्मना सारूप्यं तदा भगवतोऽपि ज्ञानं रक्तं स्यात् । एवं सति केशावरणमप्रहीणं स्यादित्यावृत्तिसङ्गावः प्राप्नोति ।

²⁶TSP on TS BP 84 (TSPb 699,24–700,8): अथैकदेशेन सारूप्यं तथापि द्वाकारस्याप्रहीणत्वाज्ज्ञेयावरणसङ्गावः प्राप्नो-ति ग्राह्याकारकलङ्कितत्वात् । तथा हि — एकस्य द्वैरूप्यं भावि-कमयुक्तमिति तदवश्यं भ्रान्तं व्यवस्थापनीयम् । ततश्च भ्रान्ति-बीजस्य दौष्ट्याल्पस्याप्रहाणादप्रहीणावरण ⁱ⁾ एव भगवान्स्यात् ।

ⁱ⁾ 〃बीजस्य दौष्ट्याल्पस्या 〃 J, sa bon gnas ngan len T; 〃बी-जस्यादौष्ट्यस्या 〃 Pa B; 〃बीजस्यादोषस्याल्पस्या 〃 G.

²⁷カマラシーラ後年の著 *Madhyamakāloka* (Māl) では「ブッダの他心知」が「ヨーギンの他心知」(rnal 'byor pa

このような過失の指摘は、TS BP 75 (=PV3.434) に見られるものと同様であることから、a-1 に想定される学派もまた有形象知によって外界対象の存在が推理されると主張する経量部に同定することができる²⁸。この場合、対論者シュバグプタが経量部であることもまた示唆される。

シャーンタラクシタは、知による外界対象把握を否定した手法によって、仏知による他心把握を否定している。この一貫性は、外界対象、他心、いずれも同等に否定されるべき把握対象として扱われることによる²⁹。

gzhan gyi sems shes pa rnams) に換言し、同様の論理を展開している。

Māl (D183b3-6): / gzhan yang gal te shes pa'i 'dra ba bdag nyid thams cad kyi yin na ni de'i tshe don bzhin du shes pa yang blun po'i ngo bo nyid du 'gyur ro // rnal 'byor pa gzhan gyi sems shes pa rnams kyang 'dod chags dang bcas pa la sogs pa nyid du thal bar 'gyur te / gzhan gyi sems 'dod chags dang bcas pa nyid la sogs pa 'dzin pa'i phyir ro // phyogs gcig gis 'dra ba yang ma yin te / gcig la cha shas dang bcas pa nyid du thal bar 'gyur ba'i phyir ro // / de'i phyir 'dra ba'i sgo nas shes pa ngo bo gzhan 'dzin par rigs pa pa ma yin te de mi srid pa'i phyir ro // 'dra ba yod du zin kyang 'on kyang don gzhan mngon sum nyid du ni rigs pa ma yin te /

(一郷 2006: 11-12: 「尚又、もし(対象と)知の類似性が、(イ)全体に及ぶものであるならば、その場合は、対象と同様、知も無感覚(jada)性のものとなる。他人の心を知るヨーギンも貪欲を有すもの等になってしまう。貪欲を有す他人の心等を認識するゆえに。(ロ)一部で類似しているものではない。一なるもの(知)が、部分を有することになってしまうゆえに。《中略》それゆえ、類似しているからといって、知が、他の自体を認識することは不合理である。それ(他の自体を認識すること)はありえないゆえに。類似性があるといっても、しかし、他なるものは直接知としてはありえない」)

²⁸但し、TSPにおいてaupalambhikaという語の用いられるのは当該箇所のみであり、他の箇所においては「有形象知識論者」(sākāravādin)や「経量部」(sautrāntika)は名指しされる点で、aupalambhikaが経量部を指示することは不自然である。ゆえに、特定の学派の指示以外を指示することも考えられるから、カマラシーラはa-2の解釈可能性をも提示したと考えられる。

²⁹ダルマキールティの見解には、知の対象類似性をそのまま仏知の他心類似性へと応用することは見られない。彼はむしろ、ヨーギンの知による他心中の楽等の認識が不合理であるとする見解を退ける。次の反論者の主張はTS BP 84に類似する。

PV3.455:

येषाञ्च योगिनोऽयस्य प्रत्यक्षेण सुखादिकं ।

विदन्ति तुल्यानुभवास्तद्वत्तेऽपि स्युरातुराः ॥ ४५५ ॥

(戸崎 1985: 138: 「また或る者たちの(いうところによれば、)ヨーギンたちは現量によって(他人の)楽

シュバグプタは、ブッダの知と他心の間に、ブッダの知と外界対象の間と同様、把握者と把握対象の関係性を認める。これに対して、シャーンタラクシタ、カマラシーラは、ブッダの知と他心の間にそのような関係性を認めるとすれば、経量部シュバグプタにとって両者間の類似性がその根拠となり得るが、その類似性は決して成立しないと帰謬を指摘するのである。シャーンタラクシタとカマラシーラにとって、ブッダの知と他心の間に把握者と把握対象の関係は認められない。

3 無認識者=一切知者 (TS BP 85-86)

3.1 次にシュバグプタ、シャーンタラクシタそれぞれの一切知者観をみていく。

シュバグプタは、ブッダの知が他心すら把握しない者であるというTS BP 83-84における主張を次のようにBASK 86eにおいて批判する。は次のとおりである。

〔ブッダが〕いかなるものも認識しないとすれば、その場合、一体どうして〔ブッダが〕〈一切知者〉たり得よう。³⁰

ここでは、ブッダがいかなるものも把握しない者、いわば〈無認識者〉であるならば、どうして〈一切知者〉たり得るのかという疑問が提示されている。

さて、シュバグプタ自身による〈一切知者〉(sarvajña)の定義と、唯識派によるその定義との相違点を確認しておく。TS/Pには引用されないが、それは次のBASK 145に簡潔に示されている。

等を認識する。(もしそうであれば、)かれら(=ヨーギンたち)も(他人と)同じ領納(構造)をもつ(から)、かれ(=他人)と同様に苦しむはずである」)

³⁰TSP on TS BP 85-86^a): यदि न किञ्चिज्ज्ञानाति कथं तर्हि सर्वज्ञः स्यात्

^a)BASK 86e (栗原 1993: 193; 196 n.15):

/ rtogs med ji ltar thams cad mkhyen / 86

(「〔他心を〕認識しないならば、どうして〔彼が〕〈一切知者〉たり得よう。(86e)」)

〔ブッダを〕〈一切知者〉と呼ぶのは、

- a まさに把握者である知 (grāhakajñāna) によって彼 (ブッダ) が把握対象をくまなく把握するからであって、
- b [知に把握対象と把握者という] 二相がないこと (advaya-rūpatva/-ākāratva)³¹を知るからではない³²。

シュバグプタによる〈一切知者〉の定義aは「一切の知られるべき対象の把握者」という明快なものである。一方で、唯識派による定義bとしては「知に把握対象と把握者という二相がないこと (=唯識) を知る者」が想定されている。

シュバグプタは自らのこの一切知者観に基づき、いかなるものをも認識しない者が一切を認識する者であることの自己矛盾を指摘しているのである。

3.2 ブッダが他心をも認識しない者であるならば、そこには他心への説法等の意義や慈悲の余地がない。ブッダの一切知者性との矛盾も生じる。シュバグプタによるこの本質的な指摘に対してシャーンタラクシタはどのように問題の解決を図るのか。

シャーンタラクシタは TS BP 85-86 において次のように、〈無認識者=一切知者〉の会通を図り、自身の〈無認識者〉と〈一切知者〉の定義も明らかにする。

- 1. ムニは、カルパ樹のように、あらゆる構想の風に揺らがな。

³¹チベット語テキストから直訳すると「〔ブッダが〕不二なる相を知るからではない」となり、gnyis min rnam pa (「不二なる相」)からは advaya-rūpa/-ākāra という原語が想定される。しかしながら、ここでは nyid が省略されているとみなし、唯識性の説明である「〔知が〕把握対象と把握者という二相を欠いていること」(grāhyagrāhakalakṣaṇavaidhurya)と同様の意味が解されるべきであるから、advaya-rūpa/-ākāratva と還梵して解釈した。

³²BASK 145:

/ shes pa 'dzin pa kho na yis /
/ de gzung ma lus 'dzin pa'i phyir /
/ thams cad mkhyen par bshad pa yin /
/ gnyis min rnam pa rig phyir min / 145

- 2. それにもかかわらず、世間の人々の利益の実現をまさにもたらす。

- 1' それゆえ、〈無認識者〉(adarśana)であるにもかかわらず、
- 2' 全てのジナを〈一切知者〉(sarvavida)と呼ぶ。努力なく、ありとあらゆる〔衆生〕に対する一切知者の義務を果たすから³³。

同詩頌をカマラシーラは次のとおり簡潔に逐語釈する。次の1''は1, 1', 2''は2, 2'の注であることを指示する。また、a'はBASK 145におけるaに対応する。

- 1'' 〈無認識者〉(adarśana)について。認識 (darśana=upalambha) のない者 (Bahuvrīhi) が adarśana と呼ばれる。
- 2'' [全てのジナを] 〈一切知者〉と呼ぶのは、

- c 前世における誓願に基づき、努力なく、カルパ樹のように、あるべきとおりにありとあらゆる衆生の利益を実現するからであって、
- a' [一切を] 認識するからではない。〔ブッダが〕別の自性 (他心) をいかなる仕方であつても認識することは不合理だから³⁴。

1, 1', 1''においては、〈無認識者〉が定義されている。ブッダが〈無認識者〉であることにより、シュバグプタが認めるような一切の把握者としての仏知は否定される。

³³TS BP 85-86 (TSB 2048-2049):

कल्पपादपवत्सर्वसंकल्पवनेर्मुनिः ।
अकम्पोऽपि ⁱ⁾ करोत्येव लोकानामर्थसम्पदम् ॥ ८५ ॥
तेनादर्शनमप्याहुः सर्वं सर्वविदं ⁱⁱ⁾ जिनम् ।
अनाभोगेन निःशेषसर्ववित्कार्यसाधनात् ⁱⁱⁱ⁾ ॥ ८६ ॥

ⁱ⁾अकम्पोऽपि J Pa G; अकम्प्येऽपि B. ⁱⁱ⁾सर्वं सर्वविदं J Pa, thams cad mkhyen pa ni T; सर्वे सर्वविदं G; सर्वे सर्वमिदं B. ⁱⁱⁱ⁾○साधनात् J, bsgrub phyir T; ○सम्भवात् Pa G B.

³⁴TSP on TS BP 85-86 (TSPB 700,10-13): अदर्शनमिति । नास्य दर्शनमुपलम्भोऽस्तीत्यदर्शनः । पूर्वप्रणिधानबलादनाभोगेन कल्पतरुवद्यथाभव्यमशेषजगदर्थसंपादानात्सर्वज्ञमाहुर्नोपलम्भबलात् ⁱ⁾ । स्वभावान्तरस्य सर्वथाप्युपलम्भायोगात् ।

ⁱ⁾कल्पतरुवद्य ○ J G B; कल्पतभवद्य ○ [sic] Pa.

2, 2', 2'' においては、〈一切知者〉が定義されている。〈一切知者〉であることにより、努力なくして、他心にほかならぬ、一切衆生を利益するというように、慈悲の余地はなおも確保される。

なお、2 は既に見た BASK 145 を前提としている。両偈頌に示される〈一切知者〉の定義は次のとおりまとめられる。

- a 「知に把握対象と把握者という二相がないこと (=唯識) を知る者」
- b 「一切の知られるべき対象の把握者」 (=b' 「一切の認識者」)
- c 「あらゆる衆生の利益を実現する者」

b はシュバグプタによる定義である。a はシュバグプタの想定する唯識派の定義であり、シャーンタラクシタとカマラシーラの想定する唯識派の定義 b とは全く異なる³⁵。

したがって、シャーンタラクシタの 1 と 2 の定義によれば、〈無認識者〉と〈一切知者〉は相矛盾するものではない。ブッダが、その知に把握対象と把握者の概念構想がない点で、あるいは自心と他心の区別がない点で〈無認識者〉であり、あらゆる衆生を利益する点で〈一切知者〉であることにより、ブッダが〈一切知者〉にして〈一切知者〉であることの会通が図られている。つまり、ブッダの知は知以外のいかなるものをも把握しない者であり、自己認識としては〈無認識者〉であり、一切を利益する者としては〈一切知者〉である。

³⁵TS BP 85-86 における〈一切知者〉の定義を、McCLINTOCK 2010 は特に “their Madhyamaka level of analysis” の見地からなされたものであると分析する。しかしながら、典拠が見られないことからシャーンタラクシタ師弟に独自である可能性はあるが、「把握者／認識者」であることを徹底して排除する、唯識説の一解釈であるとすれば、中観派の教義に基いた一切知者観であるとはいえない。『中観莊嚴論』や先に見た Māl にも見られない点からもまたこのことは裏付けられる。

McCLINTOCK 2010: 355: “I think that there can be no doubt that this represents the author’s ultimate perspective on omniscience in the *Tattvasaṃgraha* and the *Pañjikā*, and probably at their Madhyamaka level of analysis as well.”

4 結論

以上の TS BP 83-86 と関連する TSP 及び BASK の検討から次の二点が明らかになった。

- (1) ブッダの知は、シュバグプタによって一切の把握者とみなされる一方、TS BP 83 によれば、知以外のものの把握者ではなく、自己認識としてみなされる。何らかのものの把握者である限り、ブッダは把握対象と把握主体の構想を離れていないことになるからである。

唯識派にとって他心の存在は否定され得ないとはいえ、TS BP 84 によれば、その他心もまたブッダによって把握されることはない。仏知と他心の関係もまた「知と外界対象との間に把握主体・把握対象関係がない」という唯識論証の基本的枠組み 2 を離れることがない。仏知もまた自己認識であり、仏知と他心との間に把握主体・把握対象関係があることは否定される。

- (2) 仏知による他心把握が否定される場合にも、ブッダの一切知者性は損なわれない。

TS BP 85-86 によれば、ブッダは他心に対して把握者と把握対象という関係を結ばない点で〈無認識者〉であり、他心にほかならぬ一切衆生を利益する点で〈一切知者〉である。この点で、ブッダが〈無認識者〉であり、かつ〈一切知者〉であることに矛盾はない。

略号及び参考文献

B, TS_B *Tattvasaṃgraha* (Śāntarakṣita): S. D. Shastri, ed. Varanasi 1981-82.

B, TSP_B *Tattvasaṃgrahapañjikā* (Kamalaśīla): see B, TS_B.

BP *Bahirarthaparīkṣā* of TS/P.

BASK *Bāhyārthasiddhikārikā* (Śubhagupta): see 神子 上 1986.

BHSD Franklin Edgerton, comp. *Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary*. (repr. Kyoto 1985)

D sDe dge edition of Tibetan translation.

G *Tattvasaṅgraha/Tattvasaṅgrahapañjikā*: E. Krishnamacharya, ed. Baroda 1926.

INAMI, Masahiro

2001 “The Problem of Other Minds in the Buddhist Epistemological Tradition,” *Journal of Indian Philosophy*, 29-4: 465–483.

J Jaisalmer Mss of TS/P: J catalog no. 377 (TS); no. 378 (TSP).

J catalog

Muni Jambūvijayajī, comp. *A Catalogue of Manuscripts in Jaisalmer Jain Bhaṇḍāras*. Delhi-Jaisalmer 2000.

JHA, Ganganatha

1936 *The Tattvasaṅgraha of Śāntarakṣita with the Commentary of Kamalaśīla*. Vol. 2. Baroda.

KAJIYAMA, Yūichi

1965 “Buddhist solipsism: a free translation of Ratnakīrti’s *Samtānāntaradūṣaṇa*” 『印度学仏教学研究』 13-1: 9–24.

KATSURA, Shoryu

2007 “Dharmakīrti’s proof of the existence of other minds,” in B. Kellner et al., eds., *Pramāṇakīrti: Papers Dedicated to Ernst Steinkellner on the Occasion of His 70th Birthday*. Pt. 1: 407–421. Vienna.

MCCLINTOCK, Sara L.

2010 *Omniscience and the Rhetoric of Reason: Śāntarakṣita and Kamalaśīla on Rationality, Argumentation, & Religious Authority*. Boston.

Māl *Madhyamakāloka* (Kamalaśīla): P no. 5287; D no. 3887.

P Peking edition of Tibetan translation.

Pa Patan Mss of TS/P: Pa catalog no. 6679 (TS); no. 6680 (TSP).

Pa catalog

Muni Jambūvijayajī, comp. *Catalogue of the Manuscripts of Pāṭāṇa Jain Bhaṇḍāra*. 3 vols. Ahmedabad 1991.

PV3 *Pramāṇavārttika* (Dharmakīrti): see 戸崎 1985.

SHASTRI, N. A.

1967 “*Bāhyārthasiddhikārikā*,” *Bulletin of Tibetology*, 4-2: 1–96.

T Tibetan (D=P).

ViK *Viṃśatikākārikā* (Vasubandhu): S. Lévi, ed. Paris 1925.

ViV *Viṃśatikāvṛtti* (Vasubandhu): see ViK.

一郷 正道

2006 「プラマーナによる一切法無自性論証—カマラシーラ著『中観の光』和訳研究(11)—」『佛教学セミナー』84: 1–24.

稲見 正浩

2008 「他心は存在するか—インド仏教後期唯識思想における他心問題—」赤司英一郎(他)編『多言語・多文化社会へのまなざし—新しい共生への視点と教育—』所収 57–78. 東京.

太田 心海

1970 「認識の対象に関する考察: *Tattvasaṅgraha*, *Bahirarthaparīkṣā* の和訳研究(下)」『佐賀龍谷短期大学紀要』17: 26–44.

海恵 宏樹

1960 「*ŚLOKAVĀRTTIKA* の関説する仏教説」『インド学試論集』1: 24–40.

梶山 雄一

1999 「他人は存在するか? —付: ラトナキールティ『他人の心流の論破』試訳—」『創価大学・国際仏教学高等研究所年報』3: 3–36.

栗原 尚道

1993 「*Tattvasaṅgraha*, *Bahirarthaparīkṣā*にあらわれる形象虚偽論について—*sarvajña* と *cittāntara*—」『印度学仏教学研究』42-2: 191–197.

戸崎 宏正

1985 『仏教認識論の研究』下巻. 大東出版社.

神子上 恵生

1986 「シュバグプタの *Bāhyārthasiddhikārikā*」『龍谷大学論集』429: 2–44.

1996 「唯識学派による外界対象の考察(2) *Tattvasaṅgraha*と *Tattvasaṅgrahapañjikā* の第23章 外界対象の考察」『インド学チベット学研究』1: 1–56.

(まつおか ひろこ、広島大学大学院[インド哲学])